

氏名	松本英治
学位(専攻分野)	博士(歴史学)
学位記番号	博史乙 第23号
学位授与の日付	2017年7月27日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第2項該当
学位論文題目	近世後期の対外政策と軍事・情報
論文審査委員	主査教授 岩田みゆき 副査教授 小林和幸 副査准教授 小宮京 副査 跡見学園女子大学教授 三谷博

論文内容の要旨

松本英治

本論文は、寛政期から文化期にかけての西洋諸国の通商要求とそれに起因する対外紛争を、近世日本が直面した対外的危機ととらえ、これが対外交渉の窓口である長崎に及ぼした影響を軍事と情報の視点から論じるとともに、幕府の軍事的・外交的対応を政策的に明らかにすることを目的とする。幕府の対応については、オランダによる情報提供や蘭学の発展との関係をふまえて検討を加えるとともに、長崎とその地域社会の特質に留意しながら、長崎警備体制や長崎の情報機能に与えた影響について考察を行った。

本論文では4点の課題を設定した。近世の長崎は、貿易都市・自治都市・軍事都市という3つの性格を持っている。これをふまえて、第一の課題を、異国船来航が長崎警備体制に与えた影響を、長崎の地域社会のなかで考察することとし、第二の課題を、異国船来航への対応を切り口として、長崎における情報操作の実態を明らかにし、近世の外交の特質に迫ることとした。また、文化魯寇事件とフェートン号事件は、それまでに幕府が経験したことない対外紛争である。これをふまえて、第三の課題を、対外紛争に直面した幕府の軍事的・外交的対応を検討し、その歴史的意義を問うことと

し、第四の課題を、長崎における情報操作の弊害を認識した幕府が打ち出していった外交姿勢を明らかにすることとした。

4点の課題を解明すべく、本論文は、全体を三部に分ち、十章をもって構成した。

第一部「対外的危機と長崎の地域社会」は、ラクスマン来航からレザノフ来航に至るまでの長崎警備体制を俎上にあげ、長崎奉行と佐賀・福岡両藩の対応を、長崎の地域社会のなかで検討した。

第一章「ロシア船来航問題と長崎警備」では、ラクスマンへの信牌手交によって浮上した長崎へのロシア船来航問題を取りあげ、長崎奉行と佐賀・福岡両藩による長崎警備上の対応を検討した。松平定信は穏便な警備方針を示していたが、具体策の構築を指示しないまま辞任した。いっぽう、長崎奉行は、来航時にはロシア船と判別されるまでは厳重な警備を必要とする方針を示した。これを受けて、佐賀・福岡両藩では、ロシア船来航に備えた警備手順を策定するとともに、老朽化した石火矢の取り替えを行った。また、阿蘭陀通詞を介して熱心に海外情報の収集にあたっていた。寛政期の長崎警備は、通説では形骸化・弱体化していたとされるが、見直しや補強が進んだことを明らかにし、再び軍事・防衛機能を表出させていると評価した。

第二章「青木興勝の長崎遊学と対外認識」では、福岡藩における蘭学者の嚆矢として知られる青木興勝の長崎遊学について、長崎の地域社会が直面していた対外問題に着目して検討し、興勝の排外的な対外認識の背景に迫った。まず、亀井南冥の強い思想的影響を受けていた経歴、『蛮人白状解』・『答問十策』・『南海紀聞』の著作を確認したうえで、長崎遊学の実態を西国諸藩の蔵屋敷の機能や阿蘭陀通詞との関係に注目して考察した。そして、長崎遊学中の著作である『阿蘭陀問答』を初めて翻刻・紹介し、当時の長崎が直面していた対外問題が興勝の対外認識に及ぼした影響を検討した。最後に、長崎警備を責務とする福岡藩では、階層を問わず対外的危機感が強いがゆえに、世界地理の研究を主軸とする蘭学から展開するという地域的特徴に言及した。

第三章「レザノフ来航予告情報と長崎奉行」では、レザノフ来航が事前にオランダ商館長から予告されていたことに注目し、伝えられた情報の内容と伝達の背景を確認しつつ、長崎奉行と佐賀藩の対応を検討した。予告情報は、通常の風説書には記されず、「別段風説書」として扱われており、輸入品価格の下落をもたらすとの懸念から長崎奉行のもとで機密管理され、江戸には伝達されなかった。いっぽう、長崎警備の当番年であった佐賀藩は、阿蘭陀通詞から予告情報を内々に入手し、町年寄を介して長崎奉行から内々の指示を引き出したので、事前に準備を進めることができた。オラ

ンダ商館長・阿蘭陀通詞・長崎奉行の情報操作、および西国諸藩と阿蘭陀通詞・町年寄の関係について、注目すべき事例を提示するとともに、予告情報がそれぞれの立場を有利にするために活用されたことを明らかにした。

第二部「対外的危機と幕府の軍事的・外交的対応」は、文化魯寇事件とフェートン号事件という対外紛争に直面した幕府の対応を、軍事と外交の両面から追究し、その歴史的意義を考察した。

第一章「フヴォストフ文書をめぐる日蘭交渉」では、文化魯寇事件の意図を知る唯一の手がかりとして注目された露文・仏文のフヴォストフ文書をめぐって、解読できなかった幕府がオランダ商館長に翻訳を依頼し、さらには意見報告や情報提供を求めたことを考察した。オランダ商館長は、露文書簡は翻訳できなかったが、観察に基づいて自身の推察を回答した。いっぽう、仏文書簡は幕府の憤激を招かぬよう穏和な表現で翻訳し、幕府の求めに応じて自身の意見も回答した。また、幕府は、蝦夷地襲撃の意図をオランダ本国へ照会して調査するようオランダ商館長に命じた。幕府は、一連のオランダ商館長の貢献を高く評価しており、ここに対外的危機に直面してオランダの利用価値を認めていく幕府の外交姿勢が読み取れることを指摘した。

第二章「阿蘭陀通詞の出府と訳業」では、文化魯寇事件を契機として、幕府が長崎の阿蘭陀通詞に相次いで出府を命じ、江戸で軍事・地理関係の蘭書や外交文書の翻訳を行わせていることを論じた。名村多吉郎・馬場為八郎・石橋助左衛門・本木庄左衛門の4名の阿蘭陀通詞について、それぞれの出府の経緯を確定した。また、訳業については、内容の紹介だけでなく、訳述の経緯、写本、利用した蘭書などについて書誌的考察を試みることで、幕府の軍事的・外交的対応を訳述から見直す作業とした。11点の訳業の考察から、事典類の翻訳から専門書の翻訳へと展開することを明らかにし、世界地図の編纂事業を契機に、幕府が天文方のもとで蘭学を管掌していく方向性を指摘した。そして、以下で論じる幕府の対応と対外政策を検討する上での基礎的作業とした。

第三章「幕府の洋式軍艦導入計画」では、これまで研究が皆無である文化期における幕府の洋式軍艦導入計画について、フェートン号事件後の長崎警備改革との関連に留意しながら、その顛末を検討した。まず、長崎奉行による長崎警備改革の方向性が西洋諸国の軍事行動をふまえたものであると指摘した。そのうえで、幕府が港内で運用する小型の洋式軍艦を建造し、さらにはオランダ人士官・技術者の招聘をオランダ商館長に打診し、外洋を航海する大型の洋式軍艦の建造と操練を計画していたことを

明らかにした。長崎奉行と町年寄・阿蘭陀通詞は計画の実現にこだわりを見せたが、オランダ商館長の交代ができなかったこともあり、計画は断念された。幕府の内部では大船建造の禁の理解が生まれていた。実現はみなかったものの、幕末の長崎海軍伝習を先取りするような構想に、幕府の対外的危機感の強さを読み取った。

第四章「幕府の戦時国際慣習への関心」では、文化魯寇事件に伴うロシアとの紛争状態が、幕府に戦時国際慣習への関心と理解を促したことを考察した。幕府は、オランダ商館長の回答や阿蘭陀通詞の訳述に基づいて、戦闘の開始と終了の合図、使者の派遣方法、和睦や降伏の示し方、捕虜の取り扱い、船旗の使用方法といった西洋諸国の戦時国際慣習を知っていたことを明らかにした。そのうえで、幕府が戦時国際慣習に関心を抱いた直接の契機はフヴォストフ文書に描かれた船旗にあったこと、戦時国際慣習は対外交渉の現場にある幕府役人にも共有されていたことを指摘した。このような文化期における戦時国際慣習への関心は国際法との出会いというべきものであり、幕末の対外交渉における幕府役人の交渉能力の高さにつながってゆく見通しを述べた。

第三部「幕府の対外政策と長崎の地域社会」は、長崎の地域社会で見られた情報操作の実態を明らかにし、それを抑制する方向性を強めていった幕府の外交姿勢を、蘭学との関係をふまえて検討した。

第一章「大槻玄沢と幕府の対外政策」では、蘭学者大槻玄沢が執筆した『嘆詠餘話』・『捕影問答』・『寒燈推語』の3つの著作を取りあげ、その書誌や内容、執筆の背景を明らかにすることで、幕府の対外政策との関連を追究した。『嘆詠餘話』と『寒燈推語』は、従来、紹介されることのなかった著作である。3つの著作に共通する執筆背景には、オランダ商館長・阿蘭陀通詞・長崎奉行の情報操作が長崎で常態化している現状があった。その抑制策として、玄沢は江戸に翻訳機関を設立するよう建言していたこと、幕府も長崎で作成された阿蘭陀通詞の訳文に原文を添付させていたことなどを明らかにした。玄沢の指摘で長崎における情報操作の弊害を認識した幕府は、政策的に蘭学を採用して、江戸の天文方に外交業務を集中させる方向性を生み出したことを指摘した。

第二章「ラッフルズの出島接収計画と長崎奉行」では、ラッフルズの出島接収計画は、オランダ商館長と秘密を共有した5人の阿蘭陀通詞以外に知られなかったとする通説を再検討した。長崎奉行の日記から、幕府が長崎奉行に命じた「紅毛内探」に注目した。長崎奉行の質問と阿蘭陀通詞の回答を記した「紅毛内探」の報告書を見出し

て紹介し、長崎奉行は来航船がイギリス船ではないかと疑っていたこと、阿蘭陀通詞は否定すべく牽強付会の回答を行ったことを明らかにした。「紅毛内探」を命じた背景には、松前に抑留されていたゴローウニンらから得た情報から、幕府が長崎への来航船に疑念を抱いたことがある。「紅毛内探」の報告書の検討に基づいて、長崎奉行は来航船の正体を見抜いており、長崎奉行と阿蘭陀通詞が幕府に虚偽報告を行っていた可能性がある」と指摘した。

第三章「ゴローウニン事件と天文方」では、ゴローウニン事件を契機として天文方が、長崎から発信された情報とそれ以外から得た情報を比較・分析し、対外情勢の把握に努めていたことを検討した。オランダ商館長は自国に不利益をもたらす対外情勢を幕府に正しく説明することはなかった。このような状況を受けて、天文方では、大槻玄沢と馬場佐十郎が中心となって、書籍や新聞記事の翻訳、来航した異国船・異国人や帰国した漂流民・抑留者からの情報収集が行われ、複数の情報をもとに対外情勢を実証的に分析する手法が生み出されていったことを明らかにした。幕府は、現地での情報操作を抑制する意図から、江戸の天文方に外交業務を主導させ、情報の収集と分析を行わせるようになったと位置付けるとともに、オランダ商館長が伝える情報の限界、定期的な情報と蘭書をもたらすオランダの利用価値にも言及した。

本論文の結論を、4点の課題に即してまとめれば次のようになる。

第一の課題に対しては、長崎警備体制が、警備手順の確立や世界情勢の把握にとどまる寛政期の理念的段階から、対外紛争を経験したことで、文化期には西洋諸国の軍事行動の特徴をふまえた実践的段階へと転換していったとの評価を与えた。第二の課題に対しては、長崎では地域社会の利害に基づいた情報操作が横行していたことから、近世の外交の特質は、長崎の裁量範囲が広い「現地外交」、阿蘭陀通詞が介在する「通詞外交」にあるとの見通しを得た。第三の課題に対しては、対外紛争は、幕府に脅威と見なす西洋諸国の軍事・外交への関心を生み出し、その導入や理解が模索されたため、幕府にとってオランダ商館長と阿蘭陀通詞の利用価値が相対的に高まっていったことを明らかにした。第四の課題に対しては、「現地外交」「通詞外交」を問題視した幕府が、長崎の裁量範囲を狭め、江戸の天文方に権限を集中させる外交姿勢を打ち出すことで、オランダと阿蘭陀通詞を適切に利用しようとしたと位置付けた。

審査の結果の要旨

『近世後期の対外政策と軍事・情報』と題する松本英治氏の学位申請論文は、寛政

期から文化期にかけての西洋諸国の通商要求とそれに起因する対外紛争、具体的には、寛政四年（1792）ロシア使節ラクスマンの来航、文化元年（1804）レザノフの来航と文化三年から四年にかけて発生した文化魯寇事件、文化五年フェートン号事件などを近世日本が直面した対外的危機ととらえ、これらが対外交渉の窓口である長崎に及ぼした影響を軍事と情報の視点から論じ、併せて幕府の軍事的・外交的対応を政策的に明らかにしようとするものである。本論文は、本文346頁からなり、2016年9月10日に吉川弘文館から出版されている。以下、その内容について概観しておきたい。

本論文は、序章・終章と全十章からなる三つの部で構成される。序章では①異国船来航が長崎警備体制に与えた影響を長崎の地域社会の中で明らかにすること、②異国船来航への対応を切り口として、長崎におけるオランダ商館長・阿蘭陀通詞・長崎奉行らによる情報操作の実態を明らかにし、近世の外交の特質に迫ること、③対外紛争に直面した幕府の軍事的・外交的対応を検討しその歴史的意義を問うこと、④長崎における情報操作の弊害を認識した幕府がとった対策や外交姿勢を明らかにすること、といった四つの課題をかかげ、第一部で文化元年レザノフ来航まで、第二部で文化三・四年の文化魯寇事件と文化五年フェートン号事件、第三部でそれ以降の動向を主に扱い、文化期に焦点をあてて時系列的に配置しそれぞれの課題について詳細に検討している。

第一部は三つの章から構成される。第一章では、従来弱体化・形骸化していたとしてあまり注目されることのなかった寛政期の長崎警備体制について、長崎奉行と佐賀藩・福岡藩の動向を中心に検討し、ラクスマン来航を契機として従来の警備体制の見直しが行われていたとして一定の評価を与えている。第二章では、福岡藩蘭学者青木興勝を取り上げ、興勝が長崎遊学中に阿蘭陀通詞の虚偽報告を見破ったことや、著者不明であった『阿蘭陀問答』が青木興勝の著作であることを突き止め、その排他的対外認識について考察している。第三章では、オランダ商館長から長崎奉行に伝えられていた「レザノフ来航予告情報」について、その国際的背景と伝達内容を検討し、長崎奉行の情報操作や佐賀藩の動向など日本側の対応を明らかにしている。このレザノフ来航予告情報は、オランダ商館長と阿蘭陀通詞との協議の上で長崎奉行に報告されたが、通常の風説書と区別して「別段風説書」として仕立てられ、江戸には伝えられなかったこと、それは輸入品価格の下落をもたらした幕府や商人たちに損失を与えると判断した長崎奉行の判断によるものであり、通常の風説書に記される情報の取捨選択に長崎奉行の判断が及んでいたことを明らかにした。

第二部は四つの章で構成される。第一章では、フヴォストフ文書といわれる文化魯寇事件でレザノフ配下の海軍大尉フヴォストフらが残した銅板文字と書簡の翻訳及び日蘭交渉の過程、第二章では、この事件をきっかけとして、ロシア船への対応や、外交文書、軍事・地理関係の蘭書の翻訳のために出府することになった四人の阿蘭陀通詞の動向と翻訳業、第三章では、事件後の長崎警備改革の一環として進められた幕府による洋式軍艦導入計画、第四章では、この時期から深まっていた幕府による戦時国際慣習への関心と理解など、文化魯寇事件とフェートン号事件という対外紛争に直面した幕府の対応について、多くの未検討史料、新史料の発見を通じて新たな事実を明らかにしている。洋式軍艦導入計画については結局頓挫したものの、その実現にむけて大槻玄沢に建言するなど最後まで積極的に奔走したのが阿蘭陀通詞本木庄左衛門であったことや、近代を特徴づける西洋機械技術の導入への本格的注目がここに始まっていたことを明らかにした。また西洋諸国の戦時国際慣習について、文化四・五年頃には幕府は体系的に理解し、対外交渉の現場にある幕府役人の間でもその理解は浸透していたこと、阿蘭陀通詞たちはそれ以前から業務知識として理解していたことを指摘し、日本における国際法の受容について、のちに中国で刊行された『万国公法』から考える研究は多いが、それ以前にも目を向けるべきであること主張する。

第三部は三つの章で構成され、長崎で見られた情報操作の実態を明らかにし、それを抑制する方向性を強めていった幕府の外交姿勢を、蘭学との関係を踏まえて検討している。第一章では、蘭学者大槻玄沢が文化期に若年寄堀田正敦を通じて幕府に献上した著作『嘆詠餘話』『捕影問答』『寒燈推語』の三点を紹介し、来航・漂着した異国船の国籍や漂流民の漂流先の虚偽報告など、常態化した阿蘭陀通詞を中心とする長崎での情報操作に対する批判、江戸での翻訳方設置の必要性の提言など、幕府の対外政策に与えた影響を明らかにした。幕府は玄沢のこれらの提言を受けて、文化八年江戸の天文方に蛮書和解御用を設置し、蘭学の公学化が実現したとし、この過程を、外交文書の翻訳をはじめとする長崎の阿蘭陀通詞の特権が、江戸の天文方に移行していく過程であると評価している。第二章では、文化十年バタビアを占領したイギリスのジャワ副総督ラッフルズによる長崎出島阿蘭陀商館接收計画について、オランダ商館長と阿蘭陀通詞らが長崎奉行や江戸の幕閣にそのことを内密にしたとされる通説に対して、長崎奉行が幕府の指示によって行った「紅毛内探」の報告書に該当する阿蘭陀通詞本木庄左衛門の書付を検討することによって、長崎奉行がこの計画を既に見抜いていたことを明らかにした。第三章では、ゴローニン事件を契機として、ヨーロッパ

情勢に関する詳細な情報がロシア経由で日本にもたらされたことについて、幕府が長崎（オランダ経由）と松前（ロシア経由）で得た情報を比較・分析して世界情勢の正確な把握に努めており、その作業は、文化八年蛮書和解御用を設置した江戸の天文方の主導で行われたこと、また幕府は、オランダの虚偽報告も見破っていたが、オランダと阿蘭陀通詞をうまく利用しつつ、江戸に権限を集中させる外交姿勢を打ち出していったことを明らかにした。

終章では、第一部から三部全体を見通すことで、当初設定された四つの課題に即してまとめている。課題①については、文化元年のレザノフ来航、文化五年のフェートン号事件を転機とみて長崎警備体制の転換を論じ、特にフェートン号事件以降長崎奉行の下に長崎地役人を組み込んだ警備体制が構築され、軍船の整備や洋式軍艦の導入も計画されるなど、西洋諸国の軍事行動の特徴を踏まえた実践的段階に転換していったと評価した。課題②については、オランダ商館長・阿蘭陀通詞・長崎奉行による幕府への虚偽報告や意図的な情報操作の事例を検証し、長崎における情報操作のありかたについて貿易利益への吸着や事なかれ主義という特徴を示し、近世外交の特質を、幕府による支配が貫徹していない「現地外交」「通詞外交」であるとの見通しをたてた。課題③については、文化魯寇事件・フェートン号事件への対応として、フヴォストフ文書の翻訳・阿蘭陀通詞の出府・洋式軍艦の導入計画・戦時国際慣習への関心について検討し、この時期の対外紛争が、幕府に西洋諸国の軍事的優位を強く認識させ、脅威とみなす西洋諸国の軍事・外交への関心を生み出し、オランダ商館長や阿蘭陀通詞の利用価値をみとめつつ、導入や理解を試みる方向性を辿ったとする。そして、このことが後に「開国」をめぐる対外交渉にあたった幕府役人の迅速で的確な対応につながったとした。課題④については、幕府の対外政策における大槻玄沢の関与と、新たに外交業務を主導した天文方の情報分析に注目して考察し、幕府の情報収集と分析能力の高さ、この時期の世界情勢の正確な把握への努力を高く評価した。

本審査委員会は、以上の内容について検討を行い、最終試験を経て以下の共通認識を得た。

本論文は、文化年間の対外紛争とその前後に注目し、この間の事件を契機として長崎警備体制が大きく転換し、幕府もまた正しい世界情報の掌握の重要性を認識して多角的に情報を収集し、新たな対外政策を打ち出していることを具体的に明らかにしている。寛政から文化期の近世社会が直面した西洋諸国の接近を、維新変革にむけての大きな転機ととらえる研究は多くみられるが、特に長崎警備に注目して、軍事や情報

といった側面からその内部に立ち入って具体的に検討を加えている研究はほとんどなく、松本氏の研究は貴重な研究成果であるといえる。また、長崎における日蘭交渉について、オランダ商館長、阿蘭陀通詞、長崎奉行、幕閣とのやりとりを具体的に明らかにし、長崎地役人を含む地域社会にまで目を向けてそれぞれの思惑を明らかにし、長崎における情報操作の実態を浮き彫りにしたこと、さらに長崎における近世外交の特質を幕府の力が貫徹しない「通詞外交」「現地外交」であるとの見通しをたてた点は注目すべき研究成果である。さらに、長崎での情報操作を認識した幕府が、文化期以降打ち出した外交政策について、江戸の天文方に蛮書和解御用を設置して外交業務を主導させるとともに、長崎の阿蘭陀通詞を呼びよせて、阿蘭陀通詞の語学能力を江戸に吸収し、情報操作を行う長崎という地域社会から分断していく過程であるとする点も日本の近世外交の特質とその変化を考える上で重要な指摘であろう。また、ペリー来航時や「開国」後の日本の近代化に向けての幕府の対応が迅速かつ的確に行われたという立場から、その背景には「鎖国」下において既に長崎を通じて西洋諸国の知識と情報が積み重ねられ、それに基づいて幕府の政策的対応が経験的に蓄積されていたこと、さらに寛政から文化期における対外的危機に直面した幕府がその蓄積に基づいて軍事や情報に関する積極的対応を行ったからであるとして、幕府や幕府役人の能力を評価するとともに、一般的にペリー来航から語られがちな、幕府による軍事的・外交的対応と西洋文明の受容による近代化の契機を、半世紀さかのぼって考え直すべきではないかという問題提起を行っている点も注目できる。

このほか、大槻玄沢の庇護者である若年寄堀田正敦についてのさらなる研究の必要性、地域社会のとらえ方など今後の研究課題がいくつか指摘されたが、本論文は、先行研究・関連研究・関連史料を精査し、多くの新出史料・未検討史料を発掘・分析して着実に論を展開し、新たな事実を明らかにしており、その内容は高い評価を得たといえることができる。

以上述べてきたことから、審査委員一同は、松本英治氏のこの論文が博士（歴史学）の学位を授与されるに値すると判定する。